

楽しくワークショップでむらづくり

フィリピン教育演劇協会(PETA)の方法に学ぶ

片倉和人 (社)農村生活総合研究センター

研修や講習会と聞いて多くの人がまず思い浮かべるのは、まじめにかしこまって講師の話聞いて自分の姿ではないだろうか。あるいは、課題を与えられて頭を抱えて苦しんだり、冷や汗をかきながら皆の前で発表している姿かもしれない。講師は学校の先生のように語り、受講者はあたかも生徒のようだ。

だからだろうか、研修が肩の凝るものであればあるほど、研修を終えて一息つく必要は切実である。講師を交えた懇親会や受講者同士の打ち上げ会は、堅苦しかった研修の雰囲気とは対照的に、ざっくばらんな語りや自由奔放なふるまいの場と化す。そこではあたかも、公式の席で発現できなかった鬱積した思いが、いっせいに噴き出しているかのようだ。

ところで、こんな風には考えられないだろうか。もし、研修や講習会の場で、参加者が自分の言いたいことが言え、互いに本音がわかり、皆が心を通い合わせることができたら、ひよっとして、打

ち上げ会のような別の機会を設けずとも、それぞれが満たされた思いを抱いたまま帰路につけるのではないかと。

今でも学校の授業を彷彿させるセミナー(講演会)形式が主流である。こうした研修はトップダウン式の講義が主体なので、どうしても参加者は受け身であったり関心が低かったりする。これに対して、体験を通して学ぶもう一つの研修の形態がある。ワークショップと呼ばれる研修の形態である。

PETAのワークショップ

ワークショップの開始時間になっても参加予定者の幾人かがまだ来ていない。ふてくされた顔をしたひとりの若者が親に引っぱられて来るのが見える。連れて来たのは村議で、しぶしぶ連れて来られたのは、高校を中退して家にいる一人息子である。のっけからこれでは、この先どうなることかと彼のが心配である。

傍観者のような態度のこの青年が、ワークショップが始まり、からだを動かして歌をうたいゲームに興じるうちに、みるみる皆の中に溶け込んでいく。最終日の創作劇の発表会ではグループの真ん中に立ち主題歌を披露する。ギターを弾きながら独唱する声はふるえている。でも、観客に向けられた眼差しは力強く、表情はとても誇らしげだ。

これはフィリピンの農村で行われた青年によるむらづくりワークショップの一コマである。

フィリピンにはワークショップの方法論で、日本のみならずアジア諸国に影響を与えている団体がある。子ども、女性、人権などの問題に対するワークショップの取り組みは国連機関でも評価されているという。一九六七年、タガログ語による民衆文化運動の中で生まれたフィリピン教育演劇協会(PETA II ベタ)という演劇集団である。それまでのフィリピンの演劇は英語かスペイン語による上流階級のためのものか、教会の祭りで上演される宗教劇がほとんどだった。これに対しP



身近な問題をテーマに芝居づくり (PETAの研修)

PETAは民衆のための民衆による、新しいフィリピン現代演劇の創造をめざして出発した。七二年からは演劇ワークショップを始めて、全国各地で展開している。PETAのワークショップは、現場の農民や教師や社会活動家などを対象にした、たとえば識字や生活改善、農業指導のようなものから、地域劇団に役立つための演劇メソッド、進修養成講座など、さまざまな目的に合わせて組まれている。

一概にワークショップといっても、その目的に

応じて、さまざまな方法が工夫されている。PETAの方法は「芸術統合的アプローチ」と呼ばれている。演劇を構成するいろいろな基本要素を自在に組み合わせる使い、ワークショップを効果的に進めていくところに特徴がある。演劇も音楽も、絵も詩も、ゲームもダンスも、すべてのプロセス、あらゆる手段が使われる。その多彩さは、

宮沢賢治の手記の一節を思い起こさせる。「おれたちはみな農民である。ずいぶん忙がしく仕事もつらいもっと明るく生き生きと生活をする道を見付けたい

声に曲調節奏あれば音楽をなし 音が然れば楽器をなす

語まことの表現あれば散文をなし 節奏あれば詩歌となる

行動まことの表情あれば演劇をなし 節奏あれば舞踏となる

光象写機に表現すれば静と動との 芸術写真を彫刻となる

光象手描を成すれば絵画を作り 塑材によれば複合により劇と歌劇と 有声活動写真をつくる表現法のいかなる主張も個性の限り可能である」

(宮沢賢治「農民芸術概論綱要」より)

目的を達成するために、あらゆる共同作業、さまざまな手段が使われる。しかし、PETAのワークショップは、芸術作品を仕上げるためというより、参加者自身が「何をしたいか」を中心に組み立てられる。参加者のもつ知識や才能は多様である。多様な文化領域にわたるプログラムは、参加者の潜在的な能力や積極性を引き出して、ワークショップを活気あるものにする。

ハナオハナオ村での演劇ワークショップ

PETAから「進行役」を招いて、九三年からフィリピンのネグロス島のハナオハナオ村では、日本からの参加者と村人との演劇ワークショップが開かれてきた。日本側は劇団黒テントの桐谷夏子さんと太平洋アジア資料センター(PARC)自由学校、フィリピン側は画家でPETAのメンバーでもあるブレンダさんが仲立ちをしている。ハナオハナオ村はサトウキビとコメをつくる農園労働者のコミュニティ。ブレンダさんが祖母からこの農園を相続したのは十年ほど前。以来、芸術(文化生活)を地域づくりの中心に据え、農園で生まれ育つ人々の自立をめざして、さまざまな模索が始まっている。年に一度開かれる演劇ワークショップもその一環で、村人にとっては年に一度のお祭りのような楽しみでもあった。言葉も違えば文化も違う日本人とフィリピン人がいっしょに劇をつくって上演する。しかも、ほ

とんだみな芝居なんて初めての人たちである。違った経歴や考え方もつ人々が集まれば、当然そこにはコミュニケーションに避けがたくともなる誤解も生じる。だからこそ気づく文化の違い、新鮮な発見の数々。絵や音楽、身振りや表情で、こ

霞が関マイク

需要と品質に即したコメ作りへの一歩

▼「水田を中心とした土地利用型農業活性化対策大綱がまとまりつつあるが、従来の生産調整(減反)助成金を廃止して、麦、大豆、飼料作物の栽培促進に振り向けることで、転作作物の定着と、需要と品質に即したコメ作りへの方向転換に一步を踏み出した。五年後に助成金を見直すことになっているが、その時は別の観点からの助成の仕組みになっているかもしれない。また、減反面積ではなく、生産面積を配分することになるが、データの蓄積が必要なものもあり、二〇〇〇年産については県別の配分を含め、今年と同じ方法で行う。(世界貿易機関シートル会議の見直し)ローザンヌ非公式閣僚会合での応酬からみても予断を持ってコメントできないが、努力して何とか日本提案での成果を得ないといけない」(10月28日の記者会見で高木勇樹事務次官が述べた中で)

んなにも互いの情報や感情を共有できることを知る驚き。PETAの手法を通して、コミュニケーションや表現の方法は、なにも言葉だけではないことを痛感する。

農村生活改善の

ビジョンづくりワークショップ

国際協力事業団(JICA)が九六年から行っているフィリピン農村生活改善研修強化計画(TSEP)でも、ボホール島の村々で住民による活動計画づくりに、このPETAのワークショップの方法を採用し、大きな成果をあげている。このプロジェクトには日本の農村生活改善に長く関わっていた元普及員の方々も参加している。日本のすぐれた経験をフィリピンの農村に生かせないかという発想が元になっているからだ。しかし、生活の仕方も文化も違うフィリピンの農村が、具体的にどんな生活改善の課題を抱えているかは自明ではない。改善策を示して技術援助する前に、問題そのものをまず設定しなければならなかった。

綿密な調査をすればするほど、生活実態への理解は深まり、問題点がつきつき浮かび上がる。しかし、何が本当に重要なかは、外部の者が見極めるのは難しい。外部の目には、理解の程度に応じて、問題もまた違って見えるからだ。援助される住民のニーズを見誤れば、援助する側の善意が空回りしたり、負の影響を及ぼしてしまうことだ

つである。

住民の意向は、住民自身に直接聞いてみるのが、近道である。自分たちの地域では何が問題で、どこを改善したいと思っているか、そのために自力で何ができて、どこを外部の援助に頼らねばならないか。地域の計画づくりに、できるだけ住民の総意を汲み上げたいと思うとき、ワークショップは有効な手段となる。

これはなにも外国援助に限らない。先生は生徒を教えるのが仕事である。しかし、生徒を前に、自分が答えを持っていない問題に出くわすことだつてあるだろう。あるいは、住民を先導する役目を担っている役場の職員がいる。でも、どこに引っ張っていったらいいのかわからないで悩んでいるかもしれない。そんなとき、ワークショップという方法があることを思い出してほしい。

緊張を解く手法

会合や研修において、学識者や地域のリーダーなど、一部の者だけが発言者となっている場合が多い。ワークショップの参加者も概して恥ずかしがりやの傾向がある。だから、ワークショップを始めるにあたってまず注意するのは、参加者をリラックスさせること。緊張を解くための、身体をつかうゲームの種類は多彩である。愉快で楽しいゲームの数々を、ここでは少ししか紹介できないのが残念だ。

「人間知恵の輪」、別名「困った輪」

まず、全員肩が触れ合うほど寄り添って円形に立つ。目を閉じて、両手を前に差し出す。自分の右手でどれかの手を、左手でどれかの手をつかむ。皆の手が重なったところで目を開ける。ぐちゃぐちゃに絡み合った手が目の前にある。対になっている手を離さずに、こんがらがった関係を、ゆっくりみんな解いていく。「一つの輪になるかもしれない」と進行役が説明する。ふたりに手をつないでできた小さな輪が一つできている。残りの皆は、あーだこーだ言いながら絡み合いをほどこいていくと、やがて大きなもう一つの輪が現れた。進行役いわく、「星とそのままを回る衛星のようだね。さて、このゲームをやって何か感じたことはありますか?」。それに答えて、参加者のひとりがかう言った。「難しそうに見えることでも、解決できるんだなと思った」

◇ こうしたゲームや身体動作による表現を、幼稚園の遊戯のようだと侮つてはいけない。まずは手足を動かして、こわばった身体をほぐす。身体がほぐれると、自然と気持ちもほぐれてくるものだ。また、ゲームや遊びを、プログラムの流れの中で、後に続く主要なプログラムの布石となるように組んでみる。いつの間にかチームワークの機運を生んでいたり、次のグループ活動への準備となるように。緊張、くつろぎ、緊張というリズムをつくり出せば、集中力を持続する手助けにもなる。

参加者の知恵を引き出し興味をかき立てながら、共通の目的に向かつて導いていくのが進行役の大切な役目である。ワークショップは、いわば参加者ひとりひとりが先生でもあり生徒でもあるような、皆が互いに学び合う場である。参加者の声に耳を傾け、その意見や考えを尊重する進行役もまた、ともに学ぶ立場にある。

互いに知り合う手法

自由にもが言える雰囲気をつくるには、まず自分が最も気兼ねなく話ができる相手はどれかを考えてみるとよい。答えは、互いの性格を熟知した友人同士、ではないだろうか。だとしたら、参加者同士が、いち早く顔見知りになったり、すでに顔見知りだったらさらに相手を深く知ることが大切である。自己紹介の代わりに、たとえば「太郎と花子」というゲームがある。

「知り合うためのゲーム「太郎と花子」」

二人ずつ組になって、自分のパートナーの顔を紙に描く。ただし、次の二つのルールを守ること。
①相手の顔を見つめたままで、手元の紙を見てはいけない
②ペンやクレヨンを紙から離さない
——どんなに絵が得意な人でも、福笑いのようなおかしな顔にできあがる。
似顔絵を互いに見せ合った後、数分間、相手のことをいろいろ尋ねる。
全員がひとつのグループになり、ひとりひとり順番に、相手について発見したことを発表し、全

員で情報を分かち合う。たとえば、太郎は、花子を描いた似顔絵をかざしながら、みんなの前でこんな風に紹介する。「わたしは花子と言います。子どもがふたりいます。夫と知り合ったのは〇〇で、きっかけは……」

◇ これなら、絵が上手下手はあまり関係ないし、自分のことを語るよりは、人前で語る恥ずかしさもいくぶん薄らぐ。

問題をみつける手法

個人の発意や作業を積み重ねて、グループの活動をつくり出し、グループごとの成果は、さらに全体で分かち合う。ワークショップでは、こうしたプロセスを踏みながら、共通の目標に向かって共同作業を繰り返していく。出発点は、ひとりひとりが自分の気持ちや考えを言葉や形に表すこと。自分のもつイメージを絵に描いてみることによって、個人の生活やこれまでの経験を表現するという方法もその一つである。

「ライフ・マップ(生活地図)あるいは人生地図」グループにわかれ、ひとり一枚ずつ、自分の「ライフ・マップ」を描く。現在の一日を絵に描けば生活圏の地図になるし、子どもの頃の生活を描けば、思い出の中にある自分の家の周辺地図が描きあがる。「生まれたときと、これまでの二つの大きな出来事、それに夢をかき入れること」というようなアドバイスを与えれば、それぞれ自分の「人

生地図」ができあがるかもしれない。ライフ・マップといってもさまざまなバリエーションがありうる。ライフ・マップをどう解釈しどんな指示を与えるかは、プログラムの意図する目的によって違ってくる。

ライフ・マップが描けたら、グループ内で、それぞれが自分の絵を言葉で説明してみる。村の住民を対象としたワークショップだったら、グループごとに個々のライフ・マップをつなぎ合わせて一枚の村の地図をつくってみよう。

最後に、グループごとに全員に向けて、自分たちのグループのライフ・マップはどんなだったか発表する。

ライフ・マップは、個人の経験の中から現在の地域のあり方を捉えなおす方法としても活用できる。地域の環境の問題点を探る「点検地図づくり」のプログラムにつなげて、その伏線にすることも可能である。

点検地図づくりは、地域資源を生かした活性化対策として、日本で用いられている方法である。フィリピンの農村生活改善のプロジェクトでも、千葉大学園芸学部の下木勇さんを進行役のひとりを迎えて、このプログラムをワークショップの中に取り入れてみた。単に地図を囲むだけではなく、実際に地域を歩いて「良い点」(資源)と「チャレンジ」(問題点)を探す試みが、とても新鮮であった。

解決の糸口を探る手法

日常生活では、たとえ深刻な対立や醜い争いごとを抱えていても、他人にはできるだけ知られまいとする力が働く。問題があっても隠されがちで、表だって語ることをはばかる雰囲気がある。

ドラマでは逆に、そうした葛藤は物語の核をなすものである。葛藤があるからこそ、人々を動かして、その解決に向かわせる。

問題点を見定めることができれば、それをテーマに劇をつくってみよう。問題の解決の手だてを探るために。でも、その前に、口と、からだ、チームワークの準備運動をしておこう。

【口論の練習】

二人が組になり、口げんかを演じてみる。たとえば、ひとりが嫁の役、もうひとりは姑の役。あるいは、結婚をめぐる親と子の葛藤を再現したり、農地の相続をめぐる兄弟の争い、ボーイフレンドをめぐる女友達同士のいがみ合いでもいい。実生活の中の身近な例を想定すると、臨場感あふれるものとなる。

しばらくたつたらいったんやめて、各組が順番に喧嘩のようすを再現し、それを皆で見て楽しむ。

【鏡ゲーム】

二人組になり、お互い向き合って立つ。一人は鏡の前に立つ人、もう一人は鏡像の役。鏡の前の人、ゆっくりと次々とポーズを変えていく。鏡像は、前に立つ相手の動きと同じように動く。

新種の大吟醸酒造好適米を開発 広島県立農業技術センター

広島県はこのほど、県立農業技術センターで育成した新種の酒米「千本錦」を農水省に品種登録出願した。大吟醸用酒造好適米の切り札として開発したもので、二〇〇一年初頭には一部市場で売り出されるとみられる。

千本錦は、大吟醸用の酒米として有名な「山田錦」と、広島で長年栽培されてきた一般米「中手新千本」を掛け合わせて開発した。山田錦は、丈が長く倒れやすいことなどから、県内の栽培面積は酒米全体のうち四割程度、四十粒にとどまっている。広島原産の酒米としては八反系酒米のシェアが圧倒的だが、最高級酒用の醸造は技術的に難しいという。

このため県立食品工業技術センターが一九九〇年から千本錦の開発を進めていた。千本錦は、山田錦より丈が十センチ程度短く、また一週間程度早く生育するため栽培しやすという。

県農産課によると、現在酒造企業約三十社が醸造に積極姿勢を示している。県は今後、県内約千粒の酒米栽培面積のうち約三千粒を千本錦に転換していきたいと考えて、既存の八反錦と雄町と合わせて酒米の三本柱とし、「多様なニーズにこたえていきたい」としている。

(梅沢幸治＝広島支社)

互いの役割を交替して、もう一度。

「形をくださいゲーム」

グループを三つくらいに分ける。各グループは、十数えるうちに、名前を告げられた物の形を、からだを使ってつくり出す。進行役は、各グループに、たとえば「花」とか「溶けていくアイスクリーム」とか別々に指示する。

あるグループのつくった形をみて、進行役は、ほかのグループの人に尋ねる。「何だかわかりますか？」

準備運動がすんだら、ために即興でドラマをつくってみよう。

「動きたす一枚の「写真」」

老人介護の問題を取り上げるのなら、たとえば「寝たきりの年寄りのいる農家」というような状況設定をする。一グループ(五人)でその場面を映した写真を一枚つくる。

まず、ひとりが寝たきりの老人役になり、床に寝転がる。このシーンに、ひとりひとり黙って自発的に加わっていく。つぎの人は、老人の枕元に跪いているから、介護をする嫁の役だろう。三人目は、ちょっと離れたところに立って農作業の動作をしている。一家の主人かもしれないし、近所の農家の人かもしれない。四人目は、学校から帰ってきてテレビゲームに興じる子どものような。五人目は、部屋に置かれたテレビかもしれない。飼われている乳牛、あるいは、たわわに実った庭

の柿木を演じているかもしれない。こうして、一枚の絵ができあがる。

進行役がみながら「動かないで」と言い、寝たきりの老人役に向かって「はい、ひとこと」とせりふを促す。老人役は「うつつ、うとうとう」とうめき声を発する。次は嫁の役を指す。嫁は「若いときにいじめられたことを思い出すと、ケツのひとつもつねりたくなる」といいながら、手荒く老人の下の世話をする動作をする。……こうして、一つの場面が即興でできあがっていく。

今度は、問題が解決した後の理想的な状況を、同じように、一枚の絵にしてみる。

さらに、理想の状況に至る過程を、二つの場面にしてつくってみる。

それら四つの場面をつなぎ合わせて、一つのドラマに仕立てていく。

◇

もちろん、即興ではなく、シナリオをもとにして演じてもいい。その場合でも、参加者の経験やアイデアをもとにエピソードをつくり、物語(ストーリー)を組み立てる。「ライフ・マップ」をもとにしてもいいし、単純な定型を示して、それに当てはまる形ですまず詩を作り、その詩の一行一行を一つ一つの場面に仕立てていくやり方もある。

こうしてできた作品を発表する場をもうけ、観客と意見交流を行って、ワークショップに参加していない人も巻き込めば、広く住民間で問題意識や解決策を共有することも可能となる。こうした

点も、演劇づくりの強みである。

ワークショップは、参加者からだを動かす、心とからだで何かを会得する場である。「このワークショップでは、正しいとかまちがっているとかいうことはない。それぞれが楽しみながら目標を達成できればいい。個人の、人生にむき合う態度を変革するために行われることもある。自分の中に収めてしまわずにできるだけ共有しよう」。PETAのベテランの言葉である。

暑い日には高くなる清涼飲料?

米紙ニューヨーク・タイムズによると、米清涼飲料大手のコカ・コーラ社は、気温が高くなると自動的に清涼飲料の販売価格が高くなる自動販売機の導入に向け検討を始めた。同社のスポークスマンによると、今のところ一般消費市場への導入は行われていない。

同紙によると、このような販売機は気温検知器とコンピュータチップを使って比較的容易に製造できる。同社は自動販売機による売り上げを拡大するために、需要の少ない夜間に清涼飲料の値段が下がる販売機の導入も検討中だという。同社のライバルであるペプシコ社のスポークスマンは「暑い時に値段を上げる販売機は暖かい地域に住む消費者を搾取するものだ」として、コカ・コーラ社の取り組みを批判している。(ニューヨーク時事)